

釧路湿原自然再生協議会
第 21 回 再生普及小委員会
(議事要旨)

日時：平成 25 年 6 月 27 日 15:30-17:30

場所：釧路市生涯学習センターまなぼっと

4 階 和室 1・2

1. 開会
2. 議事
 - 1) 行動計画ワーキンググループの経過報告
 - 2) 環境教育ワーキンググループの経過報告
 - 3) 鶴居村釧路湿原流域ガイドマップ作成について
 - 4) 釧路湿原自然再生協議会基金の活用方法について
 - 5) その他
3. 閉会

1. 開会

委員自己紹介

2. 議事

1) 行動計画ワーキンググループの経過報告

● 事務局

- ・資料 1-1 2012 年度再生普及行動計画 WG の取組み報告について説明。
 - ・「1 行動計画の進行管理、活動支援」として、ワンダグリンダ・プロジェクトの運営や PR を行った他、第 10 回フィールドワークショップでは冬の久著呂川を歩き、ハンノキ林とスゲ湿原の見学を行った。
 - ・「2 情報発信・普及活動の拡充」として、行動計画ワーキンググループのホームページのリニューアル等を行い、定期的に更新している。またメールニュースでの配信や各イベントにおける出展等による情報発信を実施した。
 - ・「3 自然再生の参加の機会づくり」として、鶴居村幌呂地区の湿原再生現場見学会を行った。参加者にはスノーシューで再生現場を見学し、途中に湧き水の水温を予想するクイズも行った。
-
- ・資料 1-2 ワンダグリンダ・プロジェクト 2012 活動報告について説明。

- ・ワンダグリンド・プロジェクトでは、市民や色々な団体が行う釧路湿原に関わる取り組みを募集し、ネットワークで結んで PR・支援する取り組みを 8 年間行っている。
- ・2012 年度は 48 団体・72 取り組みが行われ、活動内容を報告書に取りまとめた。
- ・資料 1-3 ワンダグリンド・プロジェクト 2012 活動報告（一覧）について説明。
- ・資料 1-4 ワンダグリンド・プロジェクト 2012 アンケート回答について説明。
- ・2 年ほど前からワンダグリンド・プロジェクト応募者にアンケート調査を実施し、良かったことや駄目だったこと要望等の意見をもらっている。
- ・いただいた意見の中には、参加者の横の繋がりを是非作りたいという意見も多く、交流座談会を開催、また参加者が集まって共同プロジェクトをやってはどうかという意見もあった。
- ・資料 1-5 ワンダグリンド・プロジェクト 2013 活動予定について説明。
- ・2013 年の活動は既に始まっており、現在 51 団体・個人、計 78 件の取り組みの応募があった。
- ・新規参加は 3 件あり、このうち 1 件は町内会としての初めての参加があった。
- ・資料 1-6 ワンダグリンド・プロジェクト 2013 具体的取組予定（一覧）について説明。
- ・資料 1-7 2013 年度再生普及行動計画 WG の活動予定について説明。
- ・「1 行動計画の進行管理、活動支援」、「2 情報発信・普及活動の拡充」はこれまでの取り組みを継続する。
- ・「3 自然再生の参加の機会づくり」は重点的に取り組む計画であり、前年度に引き続き、「釧路湿原の自然再生に参加しよう！」イベントを実施する。
- ・自然再生事業地の見学会として、土砂流入対策や水循環の取り組みに市民が参加する機会を提供したい。
- ・資料 1-8 市民参加イベント「釧路湿原の自然再生に参加しよう！」の促進について（検討）に基づいて説明。
- ・昨年度は、ワンダグリンド・プロジェクト 2012 の取り組みの中から、市民が参加でき自然再生に繋がる取り組みを事務局で集約し PR を行った。
- ・ワーキンググループでは、昨年度の反省を踏まえ、今年度どのように取り組むかについて議論を行った。昨年度はワンダグリンド・プロジェクトの取り組みのみで

あったが、今年度は自然再生協議会の各小委員会が行う自然再生の取り組みも集約して ALL 協議会として取り組みを行う。

- ・今年度は 18 取り組みと昨年度より 1.5 倍取り組みが増え、各取り組みを A3 カラーチラシに取りまとめている。
- ・チラシでの掲載方法で新たに工夫している点として、共通のテーマごとに、例えば「子どもの自然体験におすすめ！」として一括りにまとめ、その中で更に「夏休みの自由研究に！」などとして各取り組みの PR ポイントを説明している。
- ・「大人の社会見学」のテーマでは、大人の知的好奇心をくすぐるような取り組みを一括りにし、「長期滞在の方歓迎！」を PR ポイントとして長期滞在者を意識した取り組みも掲載した。
- ・達古武オートキャンプ場での朝の森林再生現場の散歩では、「キャンプ場宿泊者限定」を PR ポイントにし、多くの方に達古武キャンプ場に来てもらいたいと考えている。
- ・若い年齢層にも是非、釧路湿原に来てもらいたい。20 代から 40 代の独身男女を対象に、達古武湖の自然再生の取り組みであるヒシ刈りを体験してもらい、その後みんなでヒシカレーを作るなどして出会いのきっかけになれば良いと考えている。
- ・今まで釧路湿原や自然再生に関心がなかった人に、参加してもらえよう工夫をしていきたい。
- ・7~9 月が「自然再生の市民参加」集中期間であり、積極的に PR をしていく。

● 委員

- ・あくまでも個人の考えであるが、私共の大学では洞爺湖でウチダザリガニの駆除を 5 年ほど行っており、いろいろな経験がある。資料 1-8 で PR と連携とあったが、私共も連携できるのか可能性を伺いたい。
- ・可能性があるのならば、大学へ帰ったらヒグマやエゾシカの研究メンバーにも話題提供したい。

● 事務局

- ・是非いろいろなところと連携して取り組みが活発化していけるようにしたい。

● 委員長

- ・道東の研究機関なり学術組織なりが共同研究することは、そうたくさんはないので、学生達と一緒に何か調べたり活動するとか、もう少し考えて追求していきたい。

2) 環境教育ワーキンググループの経過報告

● 事務局

- ・資料 2-1 環境教育 WG の取組み報告について説明。
- ・「1 教科学習での釧路湿原の活用促進を目的とした学習資料の作成、学習資料の活用促進」では、理科・社会等の教科学習の中で釧路湿原を題材として扱ってもらい、少しでも釧路湿原に関心を持ってもらえることを目的として進めてきた。
- ・参考資料にあるように、昨年度までに「釧路湿原の地層」、「食物連鎖」、「流れる水の働き」の3つの単元について学習資料を作成した。
- ・学校へのPRとして、チラシやサンプルDVDを配るなどしており、先生からの意見もいただいている。
- ・HPを見てもらい意見をいただきたい他、「食物連鎖」に関しては釧路湿原の生き物の写真が足りないのご提供いただきたい。
- ・「2 教員研修講座の実施」では、先生向けに教員研修を行った。
- ・釧路湿原と共にある地域の産業と人の関わりをテーマとして、塘路湖のワカサギ孵化の取り組みや地引き網体験などを通して、塘路湖の育てる漁業について理解していただいた。
- ・参加者の先生からは、自然と人の暮らしをテーマとして取り上げた内容であり非常にわかりやすかったという意見が多かった。
- ・今後も「周辺の産業と釧路湿原の保全」をテーマの1つとして研修を行っていきたい。

● 委員

- ・資料 2-1 の食物連鎖の図に関して、サンショウウオの先生から、この図で描かれている環境だとキタサンショウウオが全部魚に食われて全滅してしまうと指摘いただいた。
- ・お集まりの方々の中にはいろいろな分野の専門家もいらしたりするので、もしお気づきの点があれば遠慮なく環境省なり事務局にご指摘願いたい。

● 委員

- ・個人的な意見ではあるが、釧路市に他の地域から来られて湿原や再生事業を勉強されたりする方々が結構いて、みなさん乾燥化に関心を持っていることも多い。今回の教材の食物連鎖の様に、次は乾燥化のジオラマのようなものを作っていただ

けたらと思う。

● 委員

- ・乾燥化については、自然再生協議会の中でも議論されていて、まだメカニズムが完全にわかっていない。そちらの方の議論の流れも見ながら適切な時期に何か作っていくのが良いと考える。

● 事務局

- ・土砂流入対策の取り組みの中では、人工ケルミのジオラマを作成したり、再生現場を体験・調査してもらう予定である。出来るだけ釧路湿原で起きている問題を身近なものに捉えてもらうことが重要である。

● 委員

- ・教材の食物連鎖と関連して、ハンノキは比較的乾燥・陸地化になっている環境、ヨシはもう少し水位が高い所で生育するとか、水環境との関係で湿原植生を紹介するパートがあっても良いと思う。
- ・「流れる水のはたらき」の部分で、右の写真は何を示すものか。

● 事務局

- ・流れる水のはたらきということで堆積の様子を説明している写真である。資料に示した写真の他にも豊富な写真を使って紹介しており、HP 上で見られる。

● 委員

- ・釧路川は、他の典型的な急流から中流になり緩やかになっていくという川と違う、非常に特徴的な川である。上流に屈斜路湖という天然のダムがあり、洪水時に水を貯める機能があり、平常時になれば少しずつ水が流れて常に水量が安定しているという特徴である。さらに下流には湿原があり、洪水時には遊水地の機能があるため、その下流の釧路市街地を洪水から守っている。この教材で釧路川の特徴を紹介した方が良いと感じた。

3) 鶴居村釧路湿原流域ガイドマップ作成について

● 事務局

- ・資料 3 鶴居村釧路湿原流域ガイドマップの作成について説明。
- ・作成の経緯は、釧路湿原の保全・再生と地域産業を連携させたいという考えから始まった。鶴居村の観光振興をする側は人の暮らしや食・文化を PR したい、釧路湿

原の保全・再生する側は、再生の取り組みを知り参加してもらいたい。そこで、一緒に積極的にPRして、両立させようということで始まった。

- ・体制は、再生普及小委員会、鶴居村、鶴居村観光協会の三者がタスクチームとして取り組んでいる。
- ・ミーティングを定期的に行い、これまで4回実施し鶴居村からいろいろな方の参加がある。再生普及小委員の参加もあり、いろいろな意見をもらいながら進めている。
- ・現時点のマップ案が資料 p31 である。先週の第4回ミーティングの意見も踏まえて、今後さらに改善していきたい。
- ・マップを補足する形のブックも作っていく。目次案を p33 に示したが計30ページ前後を考えている。
- ・今後は9月と10月にミーティングを開催し、秋頃には販売を行いたい。

● 委員

- ・目次案でいうと8番目「湿原を知ろう」に、地域の文化として遺跡の紹介を入れてはいかがか。

● 委員

- ・動物にエサを与えないということを「野生動物との出会い」に入れて欲しい。また、タンチョウの交通事故も増えているので、事故を防ぐようなスピートを出さないで下さいということも入れてもらいたい。

● 委員長

- ・いま貴重な意見もいただいたように、これからも多様な方からの意見を沢山集めて、取捨選択してくるとより良いものになる。
- ・最初は、釧路湿原をとりまく5つの市町村それぞれで1つずつマップを作ろうというのがスタートであった。モデルケースである今回の鶴居村でうまくいくと、次は標茶、弟子屈などと作っていくと思うので、ご意見をどしどし出していただき頑張っていきたい。

4) 釧路湿原自然再生協議会基金の活用方法について

● 事務局

- ・資料4 釧路湿原自然再生基金の活用方法について説明。
- ・釧路湿原自然再生基金の活用の参考とするため、北海道教育大学 平岡氏より地球温暖化やまちづくりの取り組みについての話題を提供いただきその後、議論・意

見を伺いたい。

- ・今回と次回の小委員会で議論を深めて、次回の協議会で基金の活用方法を提案していきたい。

● 委員長

- ・具体的にお金の使い方に関する話だけではなく、行政や市民、活動団体がどのような仕組みで活動を築いていくか、また、停滞時にどのような形で再組織をするか、という問題や、基金を広い範囲に募ることも視野に入れた議論に繋がる話を伺いたい。

● 委員

- ・自己紹介。

* 環境と地域づくりの統合について説明。

- ・温暖化対策に積極的に取り組むべきと考える側、積極性に欠ける側が地方自治体の中でもおり、地域の皆さんに納得し、積極的に取り組んでもらうには、環境保全と地域づくりを統合していくことが、重要になると考える。
- ・温暖化対策の目的は温室効果ガスの削減だが、それだけが目的となると、地域の皆さんに取り組んで貰うには無理がある。
- ・温暖化対策を通じて、地域の社会経済活動の諸問題の解決にも繋がることを、視野に入れたストーリー立てが必要であると感じる。
- ・取り組みを進める上で地域の多様な主体、環境関係団体関係者以外の方と連携していく必要性を感じる。
- ・環境保全を通じた地域づくりと、推進する上で不可欠な市民参加と協働による環境政策、環境保全活動の推進の仕組みづくりをテーマに、研究と実践活動を行っている。

* 基金の活用方法について説明。

- ・単に助成金を提供するのみ以外の仕組みの事例として二つあり、一つはグリーンエネルギー青森という NPO が実施していた鱒ヶ沢マッチングファンドである。鱒ヶ沢町の財政難等の諸事情により現在は実施されていない。具体的には、市民からお金を募り、風力発電を立てる取り組みである。2004 年頃の取り組みで青森県の鱒ヶ沢町に建設された。電力会社への売電収益の一部と、鱒ヶ沢町からの寄付で、マッチングファンドを創設し、町内の環境保全地域づくり活動に対して助成を行った。一般的な募集、審査、助成の流れをとらずに、企画提案の発表会を公開型で行い、審査員等の意見交換をし、より良いプロジェクトになるであろうと議論をしながら、

助成団体を選定する。成果報告会も公開型で行い、意見交換を通じて、出資側も受取側も共に成長、交流ができる仕組みとなっている。

- 二つめとして、損保ジャパン環境財団「CSO ラーニング」制度という取り組みがある。保険会社の財団が実施している取り組みであり、国内の環境 NPO で長期インターン 8 ヶ月間に参加する大学生を募集し、財団が従事時間に応じて給付型奨学金時給 800 円を支給する。一般的にインターンは無償で働くが、奨学金でアルバイト等お金の心配をせずに、8 ヶ月間はこのインターンシップに専念できる取り組みである。
- インターンシップを受けている学生同士の交流や共同研究にも繋がるきっかけになる。
- この制度の参加がきっかけとなり、NPO に就職したり、大学院に進学して研究職に進むことや、環境系の専門職に就いた学生が、高い確率でいる。
- 地域として環境保全に進める若い人材を育てる事は重要であり、釧路にいかに残し、こういう仕事や活動に巻き込んでいくかという仕組みとして、参考になる。
- 結論として、立場の異なる多様な主体の支持を得られるストーリーや明確な目標が重要であり、環境系以外の主体との議論、協働で化学反応が起こる可能性が高くなる効果も期待出来る。
- 環境保全を地域で進める上で、地元住民自身が、地域の環境に親しみを持つ試みが、外の人間に親しみを持ってもらう事よりも不可欠と感じる。

* 温暖化・再生可能エネルギーの具体的な事例について説明。

- 岩手県葛巻町では、政策目標として、自然エネルギー100%コミュニティーを目指す事を掲げて、積極的に取り組みを進めている。修学旅行生を中心とした観光客の増加による地域活性化に繋がる取り組みとして成功している。
- 鳥取県三朝温泉では、環境共生型の温泉街であり、旅館からの生ごみや廃食油の廃棄により環境負荷が発生するが、生ごみの堆肥化、BDF、バイオディーゼル燃料を作り送迎バスの燃料とし、環境にやさしい温泉街を作っている。それをアピールしている。
- 滋賀県野洲市では、NPO と行政の連携事業として、市民から寄付を集めて、小さな太陽光発電の設置をし、寄付の対価として地域の中小の農園や店舗で使える地域通貨を市民に渡して、地域で買い物をすることで、太陽光発電の普及と地産地消を同時に進める取り組みを行っている。
- イギリス等では、環境対策と貧困問題対策を、同時並行で進めて行こうという取り組みも見られる。

* 地域の事例（愛媛県 内子町）について説明。

- ・愛媛県内子町、四国の人口 18,500 人の町。2010 年から温暖化対策と地域活性化を繋げた実践活動を実施している。典型的な過疎に悩む町だが、早い時期から、町並み保全の活動が始まっており、農業の活性化や、自治会レベルでの、まちおこし、地域おこし活動、グリーンツーリズム等の多様な地域づくり活動が展開されている。
- ・環境保全活動では、バイオマスエネルギーを活かした自然エネルギーの普及、取り組みが積極的に進められている。
- ・地域に活動の人材が多数存在している背景の一つとして社会教育活動が盛んであることが挙げられる。農業に関する学習会や、環境保全に関する学習会が開かれており、人材育成を、重視している点が挙げられる。二つめは、住民間での議論が大好きな土地柄が挙げられる。
- ・学習会、社会教育活動で多数が参加し勉強、議論をし、そこから多様な主体を巻き込んで事業を展開していく地域づくり活動の共通の生成パターンが存在する。
- ・環境保全が町の重要政策である。住民との間で合意されており、環境保全分野以外の方の間でも共有されている地域づくりの方向性がある事が重要な点である。
- ・ただし、内子町でも縦割化が見られ、環境分野と、他の分野の活動が個別に進められている。
- ・行政の縦割り化が批判されるが、NPO 等の民間団体の縦割り化、分野毎の縦割り化も、深刻である。
- ・縦割り化を解消していく、持続可能な地域づくりプロジェクト in 内子という取り組みを展開する。環境分野以外の地域の農業関係の方や、グリーンツーリズム関係の方等を巻き込み、温暖化対策を展開していこうと 10 回以上の会議を繰り返しながら取り組みが進められている。
- ・付随して、自然エネルギー学校という、勉強会を開いたり、住民の集まりで議論した内容を元に、町としての温暖化対策の計画を作り上げて、モデルプロジェクトを進めていく段階である。

* 地域の事例（北海道 釧路市）について説明。

- ・釧路でも異分野、異世代の多様な市民が自主的に集まるまちづくりや、環境保全についてじっくりと議論交流を深める文化を高めていく具体的な活動を生み出して行くことを目指し、実践的に活動している。
- ・低炭素、所謂 CO2 の排出量の少ないものを基軸にした地域づくりをテーマに NPO や市民活動関係者、金融機関関係者、市職員、弁護士、環境省職員、大学生、環境保全関係者、それ以外の一般的な環境保全に関係ないような方、地域づくりに関係ありそうな方が参加した低炭素地域づくり戦略会議 in 釧路を昨年、開催した。
- ・ワークショップを開催し、釧路の環境保全地域づくりの現状と課題を整理して、取り組みの方向性を共有していき、市民共同型の釧路共同発電所プロジェクトに取り

組んでいる。市民がお金を出し合って太陽光発電を設置し、利益を地域に還元することを目指した取り組みである。

- ・今年度中に発電所設置に至りたいが、土地探しに難航している。土地の情報やご提供いただきたい。
- ・温暖化対策と地域貢献に限らず、自然保護や湿原の保全、再生可能エネルギーに繋がりたいと考えている。

*地域の事例（北海道 霧多布湿原）について説明。

- ・NPO 法人ナショナルトラストが霧多布湿原を活用したまちづくりを意識し活動している。浜中町は、海沿いの漁業地域と、内陸部の酪農地域において霧多布湿原が壁の様な存在となり地域の一体性に欠けていた。これからは湿原を活用し、酪農地域と漁業地域の交流に取り組んでいく。
- ・湿原が漁業にもたらす恩恵は大きいですが、科学的には十分明らかにされておらず、漁業関係者の方も十分な認識はされていない為、研究者や漁業関係者で調査を進める海と湿原の繋がり調査プロジェクトを行う取り組みがされている。
- ・浜中町には海も湿原も山もある貴重な地域資源があるが一体的なものとしての活用がなされてこなかった。地域住民が観光資源になると思っていなかったような活動を学び、楽しめるツアーとして漁村と酪農村のエコツーリズムづくりにも取り組んでいる。
- ・今年3月にスノーモービルや、湿原の中でのスキー、ウニやホッキ貝を剥く等の地域の自然、環境、産業に親しみ、学ぶモニターツアーを実施した。

● 委員長

- ・自然再生と市民や地域産業、農業との過去の対立関係を越えた新たな連携や、互いがプラスになる意識や認識を持ち進めていく形は、取り組みの方向性としてよく似ている。

● 委員

- ・環境問題は、大きく分けると生態系保全のテーマと温暖化問題を踏まえたエネルギーのテーマと2つあるが、方針の対立があるかと思う。
- ・対立についての考えと、こういった方向性があるのか聞きたい。

● 委員

- ・自然を破壊、或いは生態系に影響を与えてまで無理に再生可能エネルギーを進めるべきではない。
- ・適材適所であり、すべてが反対ではなく、環境破壊しない適切な再生可能エネルギー

- 一を選んで両者が冷静に議論していく必要がある。
- ・何よりも重視すべきは、地域の住民との合意。十分な議論が、大事になる。
- ・地域住民との意見交換や合意形成を全く含まないままに事業を進めていった事例や、建設後、地域に全く利益が還元されない事例で、反対運動や逆風が起こっている。
- ・地域住民が参加し、地域に利益が十分還元される再生可能エネルギー事例では、あまり反対運動が起こっていない。

● 委員

- ・内子町での経験に地域づくりの諸活動に共通の生成パターンで学習会、議論が非常に重要だということと理解してよいか。

● 委員

- ・よい。内子町でも愛媛県内の企業から、大規模な太陽光発電の話があったが、地域内で学習会を行って、その結果、今すぐという事業はできないと断っている。

● 委員長

- ・問題や対立事項が起こるが、その都度、地域の合意を損なわない形が大事と考える。

● 委員

- ・こういった問題は、小さい町に適しているが、市単位になると難しい問題ではないか。小さな町での循環型は、釧路市に対してのモデルケースとまらない部分が大きい。

● 委員

- ・その通りであり、そういった指摘が多くある。
- ・釧路市、或いはその釧路湿原のように、規模が大きくなると、すべての主体を巻き込んで、大きな成果を出す事は厳しい。こういった地域の場合は、モデル的な事例をいろいろと積み上げていく方式が適している。
- ・今回取り組んでいる太陽光の発電プロジェクトは、企業プロジェクトに比べると100分の1程の小さなプロジェクトになる。その中で、異業種が参加して、一つの環境系プロジェクトを作り上げるモデルとして意義があり、釧路、或いは近隣地域にアピール出来る事例になると感じて取り組んでいる。

● 委員

- ・霧多布のモニターツアーは、現在ツアーとして実施しているのか。

● 委員

- ・パッケージとしてのツアーは実施していない。試行段階であり、基本的には、ナショナルトラストへのツアーの申し込みや相談の中で、メニューを切り分けこれから提供していく材料を増やしていく状況である。

● 委員

- ・基金が70万円程、集まっており、応募時の企画提案や、成果報告を公開で行うという形を上手く取り入れたら良いと思う。事務局の環境財団は実際支援している状況があるので、ノウハウを提供して頂けたらと思う。

● 委員

- ・70万円を使いきるような話だと、すぐに終わるので、元手に寄付を増やして、使いながら補充し拡大していく事ができると良いと思う。
- ・プロジェクトのネタをきちんと提供すれば、増やしていける感触も持っているので色々とお手伝いできると考えている。
- ・話の中でストーリーや目標がきちんと必要だということ、最後の地元の方自身はまず親しみを持つこと、この辺はワンダグリンダや行動計画の方でも作り出そうとしているところである。湿原を次の世代に残す為に再生するストーリーは、地元や湿原の近くに住んでいる方々が、湿原の事を昔から、暮らしと共に付き合ってきたということ、鶴居村の地図作りで引き出してきて感じている。それを活かしたお金の使い方をする事を一つ軸に据えてはどうかと思う。
- ・話の中で、タンチョウの活動に学生が貢献したいという話もあったが、2桁の学生を札幌から連れてくると70万円は、使い切ってしまう。
- ・再生やその地域産業と自然を絡めた活動に直結する様な研究や、ボランティアに対する滞在費等の一部分だけを助成する形で、少しずつ支援するのがよいのではないか。
- ・地元で湿原の保全とか再生と、地域を元気にするような新しい産業や活動、取り組みに対してのプロジェクト化の支援がよい。
- ・地域にお金を回して行こうというものに対して一定の支援をすることを目標に据えてはどうか。
- ・鶴居村で実施している新しい移住者や長期滞在者を増やす所に目標をつなげて行くことが出来る。
- ・自然再生や地域の活性化の新しい担い手を作るという目標を明確に据え、そういうことに対するお金を寄付してくださいと呼びかけるとよいのではないか。

● 委員

- 北斗の湿原展望台は湿原の事ばかりで、再生という事に対してはあまり管内では勉強できない。北斗の展望台の二階が空いているので、基金の 70 万円で、自然再生に関する資料や展示、外来生物と湿原の関わり等、小学生でも勉強できる様な場にしてはどうか。
- 自然再生に関する基金として寄付を集め、将来、そういう建物を作ってはどうか。
- 土地の問題はトラストサルンという会の理事長も事務局長も委員であり、トラストサルンは皆さんの善意で寄付された土地が、湿原のあちこちにあるので、その一部を何とか利用できないのか。

● 事務局

- ワンダグリンド・プロジェクトは、湿原をキーワードに団体・個人・企業も含めて立場の異なる多様な主体が集まっている。ワンダグリンドのメンバーで共同プロジェクトに取り組む事は、横のつながりだけでなく今後の発展に繋がると思う。

● 委員

- 協働型提案事業では、自治体が公募している事業が多いが、単独の組織や、主体だけで事業を行うのではなく、異なる主体を巻き込んだ事業を公募している。採択され、資金的な援助をする取り組みがあり、それも一つ参考になると思う。
- 沢山の各種団体が集まっているので、それぞれが持っている資源を出し合いプロジェクトを支援していくのも、面白いかと思う。

● 委員

- 湿原レンジャーのように子供レンジャーを作る基金に使われると、目に見えないが将来的には釧路に残る人や、環境に携わる人も出てくると思う。
- 子供たちに刺激を与えられるので、大人ではなく子供を湿原に連れて行くもので使ってもらいたいと思う。

● 委員長

- 基金のことで言うと使い方や集め方に関してはこれからも議論を続けたい。
- 今回のように話題提供があると、いろいろな意見を出せるようになるので、今後も取り入れていきたい。

5) その他

● 事務局

- 資料 5 再生普及小委員会の今後の予定（案）について説明。

- ・次回の再生普及小委員会は 11 月頃に開催したい。基金の話も議論したいので、参加いただきたい。
- ・ワンダグリンド・プロジェクトの交流座談会を 18 時よりこの場所で行う。

● 委員

- ・一番冒頭で紹介頂いたチラシについて、ラムサール条約の 20 周年記念事業が 7 月 6 日（土曜日）、7 日（日曜日）に開催される。この再生事業の活動の中身や、世界からどんな風に見られていたかを子供の会議も含めて行う。
- ・7 月 6 日午後 1 時開会の直ぐ後に、高橋先生の記念講演会がある。事務局長のネイビットやメイソンも来るので参加頂きたい。